

令和5年 9月25日

大河原町議会議長 岡崎 隆 殿

文教厚生常任委員会

委員長 佐藤 巖

所 管 事 務 調 査 報 告 書

本委員会は、調査中の案件について下記のとおり調査を終了したので、大河原町議会会議規則第76条の規定により報告いたします。

記

1. 開催の日時 令和 5年 9月20日(水)  
15時00分から16時10分
2. 開催の場所 おおがわら心のケアハウス(オーガ1F)
3. 出欠委員の氏名 佐藤 巖 大沼 常次 秋山 昇 山崎 剛  
出席委員 丸山 勝利 佐藤 暁史  
欠席委員 中村 淳
4. 説明のため出席 おおがわら心のケアハウス  
した者の職氏名 スーパーバイザー 庄司 毅
5. 議会事務局の出 議会事務局長 齋 修  
席職員の職氏名 同 局長補佐 伊藤 みどり  
同 主事 佐藤 邦彦
6. 所管事務の調査事項  
(1) 「心のケアハウス」の現況について(説明)  
(2) 町の不登校対策事業の成果と課題について
7. 調査の内容  
(1) 視察及び所員からの説明  
① 施設の職員(スタッフ)は通常、スーパーバイザー1名、自立サポートコーディネーター1名、学習サポートコーディネーター1名は常勤(週4日勤務)とし、非常勤としてサポート

一と支援員が数名在籍し、施設に通所している子どもの心のケア及び再登校支援をしている。

- ② 現在、施設には、小学生5名、中学生9名の児童生徒が不定期ながらも通所している。
- ③ 各小・中学校との連絡体制
  - 大河原小学校 月1回 学び支援教室定例会へ参加している。
  - 大河原南小学校 年3回 学校訪問を行っている。
  - 金ヶ瀬小学校 年3回 学校訪問を行っている。
  - 大河原中学校 週1回 教育相談部会へ参加している。
- ④ 「心のケアハウス」の支援体制で特徴的なところは、子どもの心身の状態や保護者の意向を尊重しつつ、引きこもり状態から脱する機会を得るため、町公用車での子どもの送迎を行っているところである。
- ⑤ 不登校対策は教育委員会の機能の範疇で対応するには限界があり、子ども家庭課や福祉課との連携が重要であると感じている。その観点では、大河原町は大変連携が強いと感じている。

#### 【質疑】

Q 数年前に、県の方では市町村が設置する不登校施設の運営費(補助金)を無くすという話があったが、それに対して市町村は反対して現行のような県からの補助金をもらっている。

A 運営費については、現在、県7割、町3割ぐらいの負担で維持している。

Q 「心の病」は家庭教育に原因があるのではないかと思うが、どのように考えればいいのだろうか。

A 不登校の子どもやその傾向をもった子供たちの中には、発達障害と疑われる傾向をもった子どもや、物事に大変過敏な子ども、昼夜逆転の生活によりリズムが崩れそれが不登校のきっかけになった子どもがいる。スマホの使い方が原因と思われる子どももいて、家庭での約束や生活の仕方については家庭教育の重要性は高いと思われる。

Q 子どもの「気まま」に原因があるのでは。

A 発達障害の傾向をもった子どももいるが、親が子どもに「負けている」面もあるかと思う。「我がまま」不登校と思われる子どもがいるように感じている。学校で自分の好きな活動があると、それには登校して参加するが、嫌いな活動などがあると、その前から学校に行かなくなる子どもがいる。

親の不登校に対する意識も変容している。学校に行きたくないならば、無理して行かなくてもいいという考え方が広まってきているような感じがする。

Q 受け入れる子どもたちが増えている中で職員の人数は足りているのか。

また、何か要望等はないか。

A ここに来られる子どもは引きこもりの子どもではないのでいいが、完全に引きこもりの子どもの今後については心配している。その対応については、大変難しい。

- Q 大河原町は不登校の子どもが多いという現実があるが、その原因は何なのか。
- A 難しい問題。最近では、小学校の低学年からも不登校の子どもが出てきている。それが高学年さらには中学校に引き継がれるということを考えると、町の不登校問題は時間がかかることだと思う。
- Q 「心のケアハウス」に必要なものはないか。
- A 少ないスタッフで何とかやっけてはいるが、子どもへの対応もさることながら、親への生活面での対応も必要と思われるケースもあることから、スクールソーシャルワーカーの必要性が増している。
- Q ここに通所している子どもたちの親の「保護者会」みたいなものはあるのか。
- A 「不登校を持つ親の会」というものを年5回開催して、親としての悩みや心配事などを、同じ境遇の人達と共有している。
- Q 通所している子どもたちの再登校までの過程の計画などはあるのか。
- A ここに通所している子どもたちは、1時間～2時間ぐらいしか滞在しない。ここに通所していても、学校に再登校できるかという点と簡単ではない。
- Q 「心のケアハウス」が大河原駅前のオーガの施設内にあることはどう感じているか。
- A 不登校の子どもたちにとって、今の施設の位置は人目を避けられるという観点では適しているのではないかと思う。
- Q 通所している子どもたちは、親の送迎で来ているのか。
- A 親の送迎があれば、施設の職員が公用車で送迎する場合もある。
- Q 通所している子どもが、学校に行っても公用車から降りないときの対応は。
- A 無理して降ろさない。無理すると益々、今後の対応が困難になる。

## 8 まとめ

- (1) 不登校に対する考え方が時代とともに変容しており、無理して学校に行かせない親も増えてきている。子どもにとって学校が全てではないものの、その受け皿となる心のケアハウスの存在は重要である。
- (2) 不登校に至る原因は様々であるが、家庭生活に起因する不登校も増えてきており、スクールソーシャルワーカーの存在が重要になってきている。  
「心のケアハウス」としては、スクールソーシャルワーカーの勤務日数が現行より増えることを望んでいる。